

末黒野

すくろの

3月号 (通巻859号)



米寿の餉

除夜の鐘撞くや星屑きらきらと
改築の白木の社初詣
畑のものばかりの雑煮米寿の餉
人日や即ち妻の誕生日
茶柱の立つや四日の朝の膳
悴む手にペンの馴染まず一人の夜
靴の踵恐ろし靴穿くとき
竹林の重さの中や風冴ゆる
寒林の明るさを行く犬連れて
湯ざめしてリビンググキツチン広すぎぬ
漱石忌英語はつひに馴染めざる
海光に寒天干さる風乾き

松本三千夫

雪吊

神木の洞にたまりぬ冬日差
裏山の木枯を飛ぶ夕鴉
リボンにも似て室咲の赤き花
何もぬぬ池を見てゐる寒さかな
遠山の暮れて枯木の仁王立ち
着水の光を散らし鴨数羽
辿りきて園の華やぎ冬紅葉
雪吊の光をはじめ縄の艶
鳥発ちて枯れの深さの残りけり
冬蝶の去りてしめやか檀那寺
年の瀬や鉄骨赤き未完ビル
納めの句座園は小春のひかり満ち

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

枯木星

安齋久英

木枯しや沖の汽笛の間遠なる
手廟に望む房総冬うらら
小春日やクレーン今し吊る構へ
学童の固まり来るや霜の道
修羅なせる昨日より今日の落葉かな
枯れきつて芒の風の頼りなし
寒禽や水面に声を落しゆき
漆黒の湖に灯の帯枯木星
江の島に入日とどめて時雨けり
灯台の裳裾に砕け冬怒濤

風の夜は

石黒興平

反復の足踏みの冴ゆ稽古能
高張の風の高さに一の酉
加はりて思はず手締め熊手市
競ひ合ふ御きやんと鯰背熊手市
眦に威勢を見せて熊手売り
山茶花や礎石の残る茶室跡
篋のさやぎひとしほ神渡し
路地の猫逃げず小春の神楽坂
ふる里の干菜を汁に風の夜は
身ほとりに辞書と胃薬漱石忌



師 走

田 中 臥 石

冬空を支ふ巨幹の山武杉
海鳴りを両手に掬ふ枯木道
山茶花へ集金人の捨て台詞
鮎並を釣る太東の冬岬
寄鍋の蟹が脚出す鋏出す
御歳暮を謝す禿頭を風走る
ふるさとの山河を胸に枯野踏む
山茶花や帰港の漁船遠くにす
横綱の暴力沙汰の師走かな
眼科医へ妻と同行冬日和

磯 波

森 清 堯

四阿の将棋の子らや小六月
売約の札目立たせ熊手市
山麓や隅の隅まで枯すすき
磯波のひかりをまとひ石露の花
夕闇の屋根より迫り花八手
冬菊の束ねらるるや日を集め
手応へをまづは確かめ大根引き
雪吊りの園丁の所作隙のなし
木枯しの声をとどむる大樹かな
鴨発ちぬ綺羅のしぶきをほどきつつ

枯野道

森清信子

枯野道呼び合ふやうに星光り
朝日差す湖の綺羅々や神渡し
黒ぐろとビルの鉄骨冬の星
彩雲の緋の滲みをり冬落暉
掃き寄する落葉に杜の匂ひかな
いつしかに故郷はるか花八手
湯豆腐や夫との暮しこぢんまり
訳ありげの人門前に夕時雨
終バスを一人降り立ち冬銀河
綿虫や百戸の村の葬の列



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



寒 禽 菅野日出子

辻祠うづむる櫂落葉かな
抽ん出て風を呼びをり野水仙
音もなく落葉せかせる池畔かな
ビル越しの丹沢淡し冬落暉
風鐸鳴る李朝館や白障子
寒禽の食みこぼす実や真紅
山茶花の花の盛りをこぼれ継ぐ

冬 菊 加藤静江

薬 喰 斉藤マキ子

冬菊や孫文の書を老舗宿
毛野国や残照の山冷え疾し
講釋の果なき翁菊花展
三門の空の淡さや冬桜
赤き実の多き庭苑冬の鳥
黒竹の細きしなりや雪催
泥つきの葱の重さを諾へり

どれどれと箸割り込ませ薬喰
遠富士や屋体崩しの冬夕焼
ささげ持つ福の軽さや熊手市
しぐるるや提げて重たき旅靴
油絵の暖炉赤あか冬ぬくし
玉子酒自然治癒力信じをり
英字紙のはいくポエムや漱石忌

冬 桜 堺 昌子

立 冬 今村 千年

山径の踏むには惜しき散紅葉
透く空へ紅ほんのりと冬桜
のぼるほど音変はる川石路の花
冬紅葉一枚岩の橋の中
花嫁の丹の橋渡る小春空
誕生日子より真紅の冬薔薇
気づかはるる身となりにけり石路の花

冬 落 暉 吉田きみえ

母の忌の仏間黄菊の花明かり
伐採の 罨 や 森の 暮 早し
冬落暉入江に数の繋ぎ舟
百幹の竹に音なし初時雨
白鳥の舞ひ降り冬の沼深む
冬ざれや夕日に染みゆく里の湖
風音に目覚めし夜半や冬の月

鎌倉や海を抱きて冬ぬくし
立冬や鎌倉野菜彩深め
茶の花のひかり纏ひぬ弥陀の径
日溜りの山茶花の径通ひ径
兼題を温めてをりぬ日向ぼこ
七曲りに連れ見失ふ三の酉
飼ひ猫の家出たままや漱石忌

枯 木 立 岡田 史女

さざん花や径しきつめて荒筵
中洲へと飛石つたふ冬もみぢ
入母屋の軒の深さや掛大根
天井は網代編なり白障子
枯木立はけの水音潺せんと
磐座に風の鳴るなり冬すすき
笹鳴きのしきりや天皇誕生日

子夜の音

岡野里子

湖に霧立つ朝の孤舟かな
冬立つや柱時計の子夜の音
万蕾の山茶花一花紅反らし
池の面のひかりへなびき枯尾花
護摩の火に昂ぶる太鼓山眠る
園児らの声のちりぢり銀杏散る
悼小山直子様
夫の君の御許にかをれ水仙花

一筆箋

小田嶋野笛

風止んで枯葉まみれの猫戻る
鷹高く飛んでおのれの風掴む
存問の歳暮に添ふる文五行
もう会へぬ人またひとり枯木屋
茶の花や一筆箋で済ます文
裸木の本性曝す大入日
人の川渡りあぐねて暮の街



青炎集

松本三千夫選



横浜 太田良一

横浜 伊藤由良

素うどんや千住の葱に京七味
抜け道へ手締め德音や酉の市
オリオンを止まり木として屋台酒
鴨の水脈池を大きく使ひけり
寺町の瓦を走る時雨かな
切り岸を借景として浮寝鳥

晩秋の富士くつきりとありにけり
ふりやまぬ銀杏落葉の中に居り
水仙の花芽すつくと立ち上がり
畳替すみて大の字深呼吸
ひととせはつかの間なりや賀状書く
名も味もまさにマドンナ伊予みかん

横須賀 福田禎子

横浜 橋場美篤

一湾に聳く舟屋花八つ手
梁の太き舟居や冬鷗
冬の湖靄の泛べる島三つ
城崎の外湯巡りや時雨傘
丹前の漫ろ歩きや下駄の音
柳散る川面に滲む湯宿の灯

冬夕焼ねねの小径の石畳
しさり見る五重塔と冬紅葉
冬紅葉映して池の底知れず
彩りの落葉根方に高く
飛び跳ねて枯葉まみれや兄弟
寺裏の大根五畝かくし畑

横浜 片岡さか江

美味珍珠丹の盆に盛り新酒酌む
黄落やきらきらと日を返しつつ
かぐら鈴めける柚子の実空青き
リズムよき鉄の音や松手入れ
水の音落葉踏みゆく切通し
諍へる夫ぬる幸や小六月

大 網 白 里

冬の日を背負ふ茶の花シルエツト
イベントの振舞酒や根深汁
いくつもの笑顔に出合ふ師走かな
暖房に揺れて睡魔の総武線
年の瀬や機能劣化と告ぐる医師
岩礁に挑む白波冬の月

上 家 正 勝

月冴ゆる遠き父母近くして

冬の月ただよふ雲を寄せつけず
海はいま一枚に晴れ石路の花
風硬く五体に沁むる寒さかな
冬紅葉けふことさらに彩なせり
いま少し欲しき日差しや返り花

横浜 饗庭恵子

舞殿に白鳩群るる煤払ひ
四君子買ひ軸も改む年用意
短日の仕舞の早し陶器市
数へ日の茶事を嗜む四畳半
飛ぶ鳥に空あり空に冬のあり
茶の花や男結びの四つ目垣

横浜 加瀬伸子

落ち林檎われに残りの持ち時間
バス席の下に新酒の二升瓶
風の研ぐ星明り街灯り
狐火と指されしものを疑はず
山眠る伊豆に湯ヶ島堂ヶ島
処方薬四十日分年詰まる

横浜 是松三雄

海の風山の風呼ぶ蜜柑山
野も山も穏やかとなり神渡し
米を研ぐ水の硬さや今朝の冬
日の温み存分に受け干蒲団
畦道の草に沈みぬ冬の蝶
冬日影万華鏡めく海の綺羅

耕 土 集

黒滝志麻子選



白壁や猫の影ゆく小六月
小春日や分骨寺へ喉仏
冬風の大棧橋や船灯り
生薑湯や香煙つつむ義士の墓所
早々と先輩来る年忘れ

平塚 尾崎千代一

息とめてつけてもらひぬ赤い羽根
鯉跳ねて水輪の白き月夜かな
大栗に空の蒼さや丹波山
小さな手小春日和の艦に遊ぶ
白息をゆたかに照らす屋台の灯

神奈川 太田 利明

秋麗や詩人となりて湖畔道
柿の木に群るる鴉や朝の日矢
見得を切る菊人形の若き武者
赤錆のレールの歴史紅葉散る
コップ酒情けこぼるる野毛の凍て

横浜 中野 大樹

いささかの寄進果せば寺紅葉
パソコンへ向かふ医師の手師走めく
事故跡の献花にそそと小夜時雨
津波来す安堵の町に小雪舞ふ
草の名を尋ねど忘る去年今年

横浜 市川 夏子

セーターの縄編太し小さき胸
冬雲や風のせかする夕間暮れ
冬うらら小いぬと稚と乳母車
百寿なる母の笑顔や日向ぼこ
北風や夕の街中背を丸め

横浜 秋山 文字

鎌倉の長谷は秋風ばかりかな
遠望の丘の芒や日を返し
蒼天や熟せる色の木守柿
縹渺と人か芒か枯野原
冬ざれや堂々と建つ朱の鳥居

横浜 田島 綾子

散る銀杏

小川 玉泉

(名誉顧問)

無住寺の棟を越えては散る銀杏
綿虫や日暮れを誘ふ杉林
冬鴟の声たばしりぬ惜命忌
庭の木々微動だにせず冬日和
黄に紅に冬もみぢ照る道路鏡
オリオンや三人なべて華甲過ぐ

雑記帳 8

親戚の法事に茅ヶ崎市・松林の松林の寺へへ
出かけた。境内の二十メートルはあろうかと思
われる銀杏の巨木が、葉を散らして丸裸に近い
状態になっていた。まさに冬景色であった。